

真夏のクリスマス商戦、「義烏」、世界中のバイヤー押し寄せる巨大な卸売市場、「100円ショップの故郷」、欧州危機の影も

サンケイニュース 2012.8.26 12:00 (1/7ページ) [欧州]

中国最大級の日用品卸売マーケットで知られる浙江省義烏（ぎう）の「福田市場」でクリスマス用品やギフト商品を買付け海外のバイヤーら。コンテナで輸出して11月下旬には欧米やアジア、アフリカなどの店頭に並ぶよう8月中の契約を急いでいる（河崎真澄撮影）

真夏の“クリスマス商戦”に沸き立つ街が、中国にある。ギフト用品や日用品などで中国最大級の卸売りマーケットが広がる浙江省義（ぎ）烏（う）市だ。12月初旬までに欧米などの店頭に商品を並べるには、8月中に契約して船積みの準備に入る必要があり、安価な中国商品を求めて世界中から買付け業者（バイヤー）が押し寄せている。ただ今年は、欧州向けが前年比で約20%もダウン。欧州債務危機は中国の地方都市にも影を落としていた。（義烏 河崎真澄、写真も）

「たった今、コンテナ3個分のクリスマスツリーの契約をしたところだ」

上海から車で5時間ほど内陸に入ったところにある義烏市。売り場面積470万平方メートルに7万軒以上もの卸売業者がひしめく巨大マーケット「福田市場」のクリスマス用品フロアで、ナイジェリア人のバイヤーが白い歯を見せて笑った。

ナイジェリアを含むアフリカの多くの国は、英仏やスペイン、ポルトガルなど欧州列強の支配を受けた旧植民地。キリスト教の文化が根付いた地域も多い。

ツリー飾りやサンタクロースの衣装、キャンドルやプレゼント用玩具など、およそクリスマスシーズンに欠かせない用品の大半は義烏の市場だけで調達できる。中国語を巧みに操ったナイジェリア人バイヤーは、1週間の義烏出張で数十万ドル（数千万円）分を買い付け、「アフリカ各地の仲間の業者に数倍の価格で転売する」と話した。

義烏から出荷して上海など近郊の港で船積みすると、欧州やアフリカに到着するまで45日から60日ほどかかる。10月上旬は中国が国慶節（建国記念日）で連休に入るため9月末までの船積みがかぎ。このため義烏を訪れるクリスマス商品を扱う業者やバイヤーは、真夏の太陽が照りつける8月が最も忙しい。

宗教も宗派も民族も関係ない。電飾製品を扱っていた店舗の経営者は、「イランなど（イスラム教などの）中東のバイヤーも欧米向け輸出用にクリスマス用品を大量調達してくれる」と明かした。福田市場の担当者は、中国国内の20万社以上の製造業者から調達可能で、商品は170万種類以上あると胸を張った。

一方で、こうしたビジネススタイルは国際情勢の変化にも影響されやすい。

義烏市の税関当局によると、今年1～6月の同市からの雑貨輸出は52億3千万ドル（約4180億円）と前年同期比で33・6%もの大幅増となった。最大の輸出先はインドで、同27・2%増の2億8千万ドル。2位のエジプト向けは同65・5%増の2億3千万ドルだった。

インドなどの新興国や、“アラブの春”に伴う混乱が収まりつつあるエジプトで消費経済が伸びていることを裏付ける。

しかし昨年まで首位だったイラン向けは、核開発問題をめぐる米国の対イラン制裁が響き、同19・9%減の2億2千万ドルと3位に後退した。消費者の購買力が落ち始めた可能性がある。

今年は、欧州債務危機の影響も深刻化している。

コンテナ輸送を扱う日系の物流業者によると、欧州からの注文が大幅に減少しており、通年では前年比15～20%のマイナスになるという。大量発注が見込めるクリスマス用品は、義烏の業者にとっては“ドル箱商品”だったが、この物流業者は「欧州向けはこの10年では最悪の数字になりそうだ」と表情を曇らせた。

サンタクロースの衣装を扱う卸売業者の女性経営者によると、欧州からの買い付け減少をカバーしようと仲間の業者十数社が、近くドイツに直販店を出店し、現地で卸売りや小売りに直接乗り出す計画を進めているという。女性経営者は米国でクリスマス用品専門店を開きたい、とも話した。

日米欧など先進国の景気低迷を尻目に、世界経済の主役に躍り出ようとする中国の姿も映し出している。

そもそも、港湾もない義烏という地方都市で、なぜ輸出型の巨大な卸売りマーケットが生まれたのか。

福岡市に本社を置く貿易業、インターナショナルトレードの義烏オフィスで買い付けをする曹鷹敏氏（32）は、「清の時代から農産品や畜産品と、砂糖などの工業品を物々交換する市場で賑（にぎ）わった義烏で、改革開放政策が進んだ1980年代に卸売業が急速に力をつけた」と話す。義烏近くで生まれ育った曹氏が子供の頃は、まだまだ物々交換が盛んだったという。

親子代々、商売人としてのセンスを受け継いだ地元の経営マインドや、浙江省の山間部の農村と、上海、杭州、寧波など沿岸都市部を結ぶ交通の要衝という地理的条件にも支えられた。さらに80年代に急成長した日本の「100円ショップ」の存在も大きい。

中国製の安価な日用品が義烏に集まることに気づいた日本のバイヤーが、日本人の消費需要に合う品質やデザイン、機能性をもつ雑貨を、義烏を通じて全土の製造業者に発注。その商品知識の蓄積が、義烏を経由する雑貨の国際競争力を高めた。いつしか「100円ショップの故郷」とも呼ばれるようになった義烏は、日本市場をステップに顧客を世界に広げていった。

曹氏によれば、日本の100円ショップで売られる中国商品の義烏での仕入れ値は1個10円前後。玩具なども仕入れ値は市価の10分の1が基本。通関や物流費用もかさむが、大量仕入れして、実際に売れば利幅の大きな商売が期待できる。「市場調査や買い付け目的で日本から出張してくる業者を週に2組は案内する」（曹氏）という。

ただ、売掛金のトラブルをめぐる“国際摩擦”も起き始めている。

昨年12月には義烏でインド人バイヤー2人が監禁され、北京の在中國インド大使館が今年1月、インド人に対し義烏での商取引を控えるよう注意喚起する騒ぎが起きた。ただ、リスクに怯（ひる）むインド人バイヤーは少なかったようで、むしろインド国内で義烏の知名度が上がり、貿易額は増えた。

したたかな世界の商売人たちは今、義烏に集まり、サンタクロースの衣装を抱えて熱い汗を流している。

■義（ぎ）烏（う）市 日用品やギフト用品などの中国最大級の卸売市場で知られる浙江省の中小都市。流動人口を含めて200万人に満たない規模の都市だが、同省内を中心に中国各地の製造業者から商品が集まり、日米欧や中東、アフリカなどから1日平均で約21万人もの買い付け業者（バイヤー）が訪れる。日本の100円ショップやホー

ムセンターなどで販売される安価な中国製商品の大半は、この卸売市場を経由して届けられる。



中国最大級の日用品卸売マーケットで知られる浙江省義烏（ぎう）の「福田市場」でクリスマス用品やギフト商品を買付ける海外のバイヤーら。コンテナで輸出して11月下旬には欧米やアジア、アフリカなどの店頭に並ぶよう8月中の契約を急いでいる（河崎真澄撮影）